

国語科学習指導案

期 日 平成26年5月31日(金) 研究授業Ⅱ
学 級 岩手大学教育学部附属中学校
3年D組 計39名
会 場 2C2D教室
授業者 楠 美 富 栄

1 単元名・学習材名 旅 NAVI ～対談「人間にとって『旅』とは何か？」～

- 補助学習材 ①『海馬』(『中学生の国語 三年』三省堂)
②様々な対談記録集
- ・『本当の自分に出会う旅』(鎌田實 集英社文庫)
 - ・『シシヤパンマの登頂』(佐々木かをり <http://www.ewoman.co.jp/winwin/>)
 - ・『R25』(富士山マガジンサービス)
 - ・『達人に訊け!』(ビートたけし 新潮文庫)
- ③『おくのほそ道』(『中学生の国語 三年』三省堂)

2 単元について

(1) 学習者観

学習者は「話すこと・聞くこと」領域として、1年次では「討論ゲームをしよう」を学習した。この学習は、意見を支える根拠の妥当性や客観性等を観点として主張の優劣を競い合うゲームを言語活動として、相手を説得するための意見の述べ方を学ぶものである。また、2年次では「プレゼンテーションをしよう」という単元において、収集した情報を取捨選択しながら資料をまとめ、資料を効果的に活用しながら、その考察を分かりやすい言葉で説明することを学んできた。これらの学習を通して、文章の内容や要旨をとらえ、表現の仕方を工夫しながら根拠をもって自分の考えを述べる力は高まりつつあるが、「聞くこと」は苦手であるという課題が明らかとなった。即時的に話の方向をとらえることができずに討論が迷走したり、突発的な相手の意見に応じて考えを述べることができず戸惑ったり、あるいは自分の意見が正しいのだということのみを主張したりと、上辺だけの討論や対話になることが、日常の授業内でもよく見られる。

しかし、アンケート調査によると、学習者自身の意識として「話すこと」は苦手だが、「聞くこと」は得意と回答している。指導者と学習者との課題意識に差が見られたが、更に調査を重ねると、予め話す内容を準備した「独話」に抵抗はないが、即興的に自分の考えをまとめ、相手に分かり易く話すことに苦手意識を強く感じていること、学習者が考えている「聞くこと」とは、相手の発言を記録すること・メモをとることであることが判明した。

「聞くこと」は「記録をとること」という受動的な行為ばかりを示すのではなく、自ら学び、課題を解決していく能力であり、能動的な行為である。「聞くこと」により、相手の意見の納得できない点は質問しつつ、言葉を尽くして自分の立場を説明し、大きな文脈の共有をめざす共同的探究活動を目指すことが可能となる。討論活動において、是と非に分かれて論じ合っても、子どもたちに見据えさせるべきは勝ち負けではなく、問題に対する理解が深まったかどうかであるべきである。これまでの相手に思いを告げるだけの交流に終始した対話指導の反省に立ち、対話とは共に考え合うことであり、聞く能力の育成抜きに考えることはできないということを実践の柱としていく。同時に、「話す能力」と「聞く能力」とは何であるかを明確にし、学習者が自覚的にその「ことばの力」を獲得していくような授業を目指したい。

(2) 学習材観

本単元では、学習指導要領国語科第3学年の目標「(3) 目的や場面に応じ、社会生活にかかわることなどについて相手や場に応じて話す能力、表現の工夫を評価して聞く能力、課題の解決に向けて話し合う能力を身に付けさせるとともに、話したり聞いたりして考えを深めようとする態度を育てる」のために、「話すこと・聞くこと」の指導内容「(エ) 話合いが効果的に展開するように進行の仕方を工夫し、課題の解決に向けて互いの考えを生かし合うこと。」に力を入れ、課題解決に向けて、効果的に展開する対話を構成する力をはぐくむことをねらっている。

本単元「旅NAVI」では、「人間にとっての『旅』とは何か？」をテーマとした「対談」を行う中で、

前述のねらいにせまる。

「対談」を辞書で調べると、「向かい合って話し合うこと。また、ある事柄について二人で話し合うこと。対話。」と定義づけられており、数ある「対話」活動の一つであるとしているが、本単元では「対談」とは、「向かい合った二人の話者が、聴衆を意識しながら、テーマ（課題）に対する自分の見解を理由とともに述べ合い、テーマに対する一定の見解を広げたり・深めたいりする対話活動」と定義し、教科論資料『「話すこと・聞くこと」学習内容系統表』中より、以下の言語能力を「対話力」としてはぐくむ活動とする。

- (1) 経験や知識を根拠にして、論理的に自分の考えを述べる力
- (2) 話合いの流れを意識して発言する力
- (3) 相手を意識して話す力
- (4) 効果的に質問する力
- (5) 相手の考えを尊重して話す力
- (6) 意見の調整を通して、新たな価値を創造しながら話し合う力

「対談」では、話の流れに沿って、簡潔にその場での発言が求められる。よって、「対談」の成否は、「聞く力」と「話す力」とが総合的に活用され、且つ即時に行うことができるかどうかによって由来する。これまでの授業でも上記のような力が求められる「対話」活動を「読むこと」の学習で行ってきたが、その力を自覚させることが少なかった故に、話合いが停滞したり、単なる交流活動のみに終始することが多く見られ、「対話」の果たす機能が十分に生かされなかったことも多い。そこで、上述した力を下記の学習材を用いて、一次や二次で視覚的に示すことで、段階的に習得と活用を図っていきたい。

補助学習材①「海馬」は、脳科学者である池谷裕二氏とコピーライターである糸井重里氏との「対談」で構成された「海馬」の働きに関わる説明的文章である。一方的な説明で終始する説明文とは異なり、難解な内容である科学的事象の説明が、説明者と聞き手とのやり取りの中で、言い換えや例示などを生み出しながら展開されることで、内容が広がったり、深まったりと興味深く読むことができる。この説明者と聞き手のやり取りの中で異なる考えや立場の人間が共通の話題で自分の考えを深めていく過程をから、「対談」のもつ有益性が感じられるであろう。また、この学習材において、説明の仕方の工夫や聞き手の果たしている役割に注意して対談を読む活動を通して、互いの発言を検討して自分の考えを深めることの実際にふれ、自らの話し方や聞き方のモデルとすることが可能である。さらに、話し合いが効果的に展開するための進行の工夫を読み取り、互いの考えを生かし合うことの実際にふれることを通して、対談の場面において良い聞き手として、もしくは説明者として、話し合いの流れを効果的につくりだすための能力を高めることも可能となる。

補助学習材②で準備した様々な対談記録集は、単に聞き手側がインタビュー的に質問するだけでなく、テーマに関する知識や持論を説明者に話し、話題を広げていく内容となっているため、「対談」がインタビューとは異なることが実感できる。また、聞き手が、聴衆（読者）の視点で話題を広げていることから、「対談」は単なる自分の興味・関心を満たすだけでなく、対面した相手のみならず、それを読む（聞く）相手をも意識しなければならないことを考えさせられる内容となっている。

また、補助学習材③「おくのほそ道」は、松尾芭蕉の残した紀行文の傑作である。東北地方の旧跡、伝説や歌枕に使われている地、そして、芭蕉があこがれた能因や西行が旅したゆかりの地を訪れて、見聞きし考えたことが、味わい深い文章と六十余りの俳句で綴られている。作品の基調となっているのは、有名な冒頭部「月日は百代の過客にして、…」に表れる「人生は旅である」という芭蕉の考え方である。月日は、限りなく続いた歴史という時間の流れの中を旅していて、人生もまたその時間の中の旅である。そのような芭蕉の思いは、対談テーマ「人間にとって旅とは何か？」を考えるための入口に相応しいものであり、作品中に表れる旅と人生への芭蕉の思いが、現代人のとらえる旅との共通点や相違点を浮き彫りにし、「対談」を豊かなものにさせることができると思われる。

(3) 「学びの自覚化」とのかかわり

国語科では研究主題を「学びを自覚しながら『自立した読者』として学び合う学習者の育成」としている。

「学びを自覚しながら」とは、単位時間あるいは単元において「内容面の理解」とともに言語活動を支えていた「方法面の理解」を促し、価値ある知識・技能として「ことばの力」の一般化を図っていく過程である。本単元で行う言語活動「対談」において必要な「対話力」とは何であるのかを意識し、学習者自

身が学習内容の定着状況を評価する「振り返り」を設けること、そして本単元で培った「ことばの力」を、どのような場面で、どのように生かしていくかということ考えさせる場を設けることで、「学びの自覚化」を図っていききたい。

「自立した読者」とは、非連続型や音声言語をも含めたすべてのテキストを対象とし、テキストに書かれた情報を「理解」するだけでなく、「解釈」・「熟考」し、テキストの内容・構造・形式・表現について、自分なりに意見を論じることができる存在である。本単元では、「対談」番組、「対談」を書き起こした文章から課題解決に必要な「対談」の構造・形式・表現を学び、そして自分たちの「対談」そのものをテキストとして、対談テーマである「人間にとって『旅』とは何か？」についての課題解決を図っていく。本単元では、学び合いを通して他者から新たな視点や考えを得て、最終的には根拠を示しながら自分自身の意見や考えを論理的に述べることのできる学習者の育成を目指したい。

3 単元の指導目標及び評価規準

(1) 指導目標

- ① 課題の解決に向けて積極的に話し合わせる中で、互いの意見や考えを生かそうとする態度を育てる。
【国語への関心・意欲・態度】
- ② 聞き取った内容や表現の仕方を評価させ、自分のものの見方や考え方を深めさせる。
【話すこと・聞くこと ウ】
- ③ 話し合いが効果的に展開するように進行の仕方を工夫させ、課題の解決に向けて互いの考えを生かしながら対談させる。
【話すこと・聞くこと エ】
- ④ 建設的に話し合えるように、場に応じた言葉遣いに注意させながら意見を述べさせる。
【言語に関する知識・理解・技能】

(2) 評価規準

| ア 国語への関心・意欲・態度 | イ 話す・聞く能力 | ウ言語に関する知識・理解・技能 |
|--|---|---|
| ・課題の解決に向けて積極的に話し合い、互いの意見や考えを生かそうとしている。 | ・他の人の意見の良いところを指摘したり、調整の仕方を提案したりしながら、自分の意見を見直したり深めたりしている。 ・課題の解決に向けて、より多くの発言を求めたり、互いの意見や考えを生かしたりするなど、進め方を工夫して話し合っている。 | ・建設的に話し合えるように、場に応じた言葉遣いに注意しながら意見を述べている。 |

4 単元の指導計画及び評価計画

| 次 | 時 | 学習目標 | 評価規準 | 評価方法 |
|--------------|---|---|---|-------------|
| 【多読】 家庭学習 | | ・「旅」に関する、様々なジャンルの図書を読み、自分の考えの参考にすることができる。 | | |
| 前単元 | | ・『おくのほそ道』を読み、芭蕉の旅に対する思いを、自分の考えの参考にすることができる。 | | |
| 一 | 1 | ・学習のねらいや進め方をつかみ、見通しをもつことができる。 ・対談のVTRを見て、対談の定義づけ、対談に必要な力について考えることができる。 | ・学習の見通しをとらえ、積極的に学習に取り組もうとしている。 【ア―①】 ・「対談」に必要な「話す力」「聞く力」について、考えることができる。 【イ―①】 ・場に応じた言葉遣いについて理解している。 【ウ―①】 | 観察 記述の分析 |

| | | | | |
|---|-----------|--|---|----------------------|
| 一 | 2 | <ul style="list-style-type: none"> 『海馬』を読み、池谷氏の説明の工夫、糸井氏の聞き手としての工夫を見つけ、その方法と効果について説明できる。 | <ul style="list-style-type: none"> 対談に関心をもち、対話の工夫について考えをまとめている。【アー②】 話合いを効果的に展開するための工夫について、説明することができる。【イー②】 対談の中で言い換えをしている言葉の効果について理解している。【ウー②】 | 観察 記述の分析 発言の内容 |
| | 3 | <ul style="list-style-type: none"> 様々な対談記録を読み、対談において必要な「対話力」を意識し、話合いを効果的に展開するための工夫について説明することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 対談に関心をもち、述べ方の工夫を意識しながら、対談を読んでいる。【アー③】 話合いを効果的に展開するための工夫について、説明している。【イー③】 | 観察 記述の分析 発言の内容 |
| 二 | 4 | <ul style="list-style-type: none"> 対談に必要な「対話力」を意識しながら、対談の準備をすることができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 対談に関心をもち、構成を工夫しながら、対談の準備をしている。【アー④】 話合いの展開を意識しながら、対談の話題をまとめている。【イー④】 | 観察 記述の分析 |
| | 5 (本時) | <ul style="list-style-type: none"> プレ対談を行い、自分の「対話力」について自覚することができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 対談に関心をもち、自分の「対話力」を意識しながら積極的に対談をしている。【アー⑤】 話合いを効果的に展開するための工夫をしている。【イー④】 場に応じた言葉遣いを意識しながら対談している。【ウー③】 | 観察 記述の分析 対談の内容 |
| 三 | 6 | <ul style="list-style-type: none"> 対談を行い、課題に対する考えを深めることができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 対談に関心をもち、自分と他の意見の違いを聞き分けながら積極的に自分の考えを深めようとしている。【アー⑥】 話合いを効果的に展開するための工夫をし、課題の解決に向けて互いの考えを生かしながら対談している。【イー⑤】 場に応じた言葉遣いを意識しながら対談している。【ウー④】 | 観察 対談の内容 |
| | 7 | <ul style="list-style-type: none"> 対談を文章に書き起こし、対談を振り返ることができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 話合いの展開を振り返りながら、対談をまとめている。【イー⑦】 対談の中での使用された言葉や言い回しに注意しながら対談をまとめている。【ウー⑤】 | 観察 記述の分析 対談の内容 |

5 本時について

(1) 主題

対談の練習を行い、自分の「対話力」について自覚すること。

(2) 指導目標

意見を比べながら話させたり聞かせたりする中で、自分の「対話力」について自覚させる。

(3) 評価規準

- ① 対談に関心をもち、自分の「対話力」を意識しながら積極的に対談をしている。
【国語への関心・意欲・態度】
- ② 話合いを効果的に展開するための工夫をすることができる。
【話すこと・聞くこと エ】
- ③ 場に応じた言葉遣いを意識しながら対談することができる。
【言語に関する知識・理解・技能】

(4) 指導の構想

前時の学習では、対談「人間にとっての『旅』とは何か？」について、対談の展開構想を考えた。その準備では、対談内容の充実を図るための進行の工夫として、相手の考えを引き出すための質問を考えたり、テーマを深めるための質問を考えたりしている。また、対談で主張したい考えと、主張を支える根拠をメモの形で付箋にまとめている。本時は、次時の「対談」のための練習時間であるが、小グループでの相互評価をもとに、自分自身の「対話力」を自覚し、効果的に話題が展開するための工夫を実の場として理解していくことをねらっている。

展開では、4人グループを編成し、2人が5分間のプレ対談を進行役を入れ替えて2回行い、残った2人が聴衆として様子を評価する。対談終了後に4人による評価の交流を行う。その後、話者と聴衆を交代し、同じ活動を行う。

対談の評価は、「対話力」としての

- (1) 経験や知識を根拠にして、論理的に自分の考えを述べる力
- (2) 話合いの流れを意識して発言する力
- (3) 相手を意識して話す力
- (4) 効果的に質問する力
- (5) 相手の考えを尊重して話す力
- (6) 意見の調整を通して、新たな価値を創造しながら話し合う力

の以上6つの観点で振り返らせ、具体的にどのように話を展開したならば対談の内容が充実したのかを考えさせる。

学習者のつまずきとして、(2)の話合いの流れを意識した発言や、(4)の効果的に質問することができないということが予想される。これらを解決していくために、話し手の発言内容の不足している点に注目することを促していきたい。特に、聴衆を意識して、①主張を支える根拠として成立するために体験や見聞の詳細が提示されているか、②主張が明確に伝わるよう要約や言い換え、繰り返しがなされているかを考えさせたい。

終結では、学習の振り返りとして、自分の「対話力」を向上させるための注意点や工夫点を意識させながら、ペアを代えてもう一度対談を行わせ、次時の本番の対談の進め方について考えさせるとともに、学習の自覚化を図っていく。

(5) 本時の展開

| 段階 | 学習活動 | 学習内容 | 時 | 学びの自覚化とのかかわり |
|----|--|---|-----|--------------------|
| 導入 | 1. 本時の学習課題を確認し、学習の見通しをもつ。 | | 3分 | ■本時の見通しを持ち課題を自覚する。 |
| | 【学習課題】 自分自身の「対話力」で不足している力は何か、プレ対談を通じて見つめよう。 | | | |
| 展開 | 2. 対談テーマ「人間にとっての『旅』とは何か？」をもとにプレ対談を行う。 | ○「対談」の内容構成 ①主張 ②旅の経験談 ③「旅」に関する本から得たこと ④『奥の細道』から得たこと ⑤永六輔氏と鎌田實氏の対談記録から考えたこと ⑥学習旅行に対する思いや考え | 17分 | |

| | | | |
|----|---|---|---|
| 展開 | <p>(1) 4人グループを編成する。 (2) 2人が対談し、残りの2人が聴衆となって評価する。 (3) 評価をもとにグループ交流を行う。</p> <p>3. 対談者と聴衆を入れ替えて、対談と評価，交流を行う。</p> | <p>○「対話力」</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 経験や知識を根拠にして，論理的に自分の考えを述べること <ol style="list-style-type: none"> ①主張の根拠となる適切な話題 ②話題提示の順序 2 話合いの流れを意識した発言 <ol style="list-style-type: none"> ①関連する話題の提示 ②話題を転換させるためのつなぎの言葉 3 相手を意識した話し方 <ol style="list-style-type: none"> ①相づち ②補足説明 ③言い換え ④聴衆をも意識した分かり易い言葉の選択 4 効果的な質問 <ol style="list-style-type: none"> ①相手の理解を確認するための質問 ②相手の考えを引き出す質問 ③話題を広げる・深める質問 5 相手の考えを尊重した発言 <ol style="list-style-type: none"> ①相手の考えの引用 ②相手の考えに対する自分の考え 6 意見の調整を通して新たな価値を創造する話合い <ol style="list-style-type: none"> ① 相違点に対する自分の考え ②対談の締め括りでの発言 (考えの変化や深まり) | <p>■相互評価 他者の意見をよく聞いて，自分自身の見方や考え方を広げる。</p> <p>17分</p> |
| 終結 | <p>4. 振り返りとして，まとめの対談練習を行う。</p> <p>5. 本時の学習を振り返る。</p> <p>6. 次時の学習を確認する。</p> | <p>○振り返りのポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対談の内容構成 ・対話力 <p>6分 5分 2分</p> | <p>■自分の「対話力」について振り返り，学びを自覚する。</p> |

6 参考文献

- ・『中学校学習指導要領解説国語編』（平成20年9月）文部科学省
- ・『評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校国語）』（平成23年7月）
国立教育政策研究所教育課程研究センター
- ・井上一郎（2012年9月7版刊）『話す力・聞く力の基礎・基本』明治図書
- ・井上一郎編著（2008年9月初版刊）『話すこと・聞くことの基本能力の育成－中学校－』明治図書
- ・村松賢一（2007年3月8版刊）『対話能力を育む 話すこと・聞くことの学習－理論と実践－』明治図書